
魔法少女リリカルなのは ～人生への終演～

識織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～人生への終演～

【Nコード】

N1333L

【作者名】

識織

【あらすじ】

とある日、僕こと七鎖 斜はダンプカーに跳ねられ死んだ。まあそれは別にいいのだけれど、死んだ直後に僕の目の前にいるのは金髪の女。

言い分を聞くと、僕は転生できるらしい。

……え、何、転生？

なんだそりゃ。

魔法少女リリカルなのは〜人生への終演〜

これは一体、どう言う事だ。

そんな言語が、まず僕の脳裏を過った。
次に網膜に写し出された風景は、言葉通りの意味で眼前まで僕に迫り来るダンプカー。

嫌な音が、聞こえた。言葉や文字で表すのが不可能なくらいの嫌な音だ。

その音は、僕の身体中の骨が砕け散る音で、内臓が押し潰される音で、僕の身体がダンプカーの衝突によって百メートル先まで吹き飛んだ音だった。

何度も道路の固い地面上で身体が跳ね、最後にズザザ、と身体を引き摺るように地面を滑る僕の身体。

写し出された世界の景色は、紅色に染まっていた。指一本も動かせない。

「きゅ、救急車！ 救急車を呼べええつつ！」

誰かの叫び声が聞こえたが、気にしない。気にする必要もない。自分の身体だ、自分だから分かる。

僕はもう、助からない。

救急車を呼んだ所であと数秒後に僕は死んでいるだろう。今の思考は走馬灯と言っちゃつだ。頭が冴え渡り、今ならフェルマーの最終定理でも解けそうな勢いだ。無理だけど。

「う……あ」

思考がフル回転の最中でも、現在進行形で死にかけてる僕の身体、唇から言葉が漏れる。

狭い景色に写し出される紅色の風景には大量の人がいて、中には嘔吐している人もいた。可哀想に、僕の現状を見たのだから確実にトラウマになるだろう。

と他人事のように考える。考えてしまっ。

嗚呼。と血に濡れた唇を開いて言葉を漏らす。周りの喧騒から、僕の呟きを聞いた者はいないだろう。

だからこそ、僕は一人静かに言葉を漏らす。

これは、僕の人生最後の言葉になるのを理解した上で。

眩く。

「つまらない、人生だった」

瞼を閉じて紅色の景色をシャットアウトしたのと同時に、僕の思考もシャットアウトした。

七鎖 斜。それが僕の名前で、生前の名前だ。別に特別な体質や特技があったわけでもない、本当に普通の人間だった。普通と言う個性を持つ人だった。

だが、今の僕に普通と言う個性を求めるのならばきっと大気圏から抜ける勢いで普通の定義から外れるであろう。それは何故か。簡単だ。

僕はさつき一度死んで、死んだはずなのに生きているからだ。何これ、夢かなんか？

あまりの出来事に失笑が表情に出てしまう。とは言っても、感情表現に乏しい役立たずの僕の表情は数ミリ唇が歪むだけだろうが。因みに、僕が死んでいると理解し、尚且つ冷静に自己分析しているのは、目の前には明らかに異常な光景があるからに他ならない。

「ぱんぱかぱーん、おめでとう、七鎖 斜。君は神界による神界ジヤンボ宝くじで転生する権利に当選しましたー」

わけの分からん言葉を喋る女は、感情の起伏が全く見られない口調でそう言った。目の前に、女がいる。それは分かる。分かるのだが その女こそが、異常なのだ。

白い素肌に直接漆黒のローブを羽織った小さな体躯。鮮やかすぎる程に鮮やかに輝く金色の長い髪。

意思を根こそぎ奪われたような鈍く光る金の瞳。

極めつけは、女の手を持った、女より長大な黒の鎌だった。悠に二メートルはある。

最後に捕捉するならば、これが一番重要になるのだが 女は、宙に浮いている。ワイヤーアクションも無しに、プカプカとふざけた擬音さえ響き渡りそうなお手軽な様子で。

「……反応がないですね、聞こえましたか七鎖 斜。聞こえたのなら返事をしてください。虚しさを覚えながら私は七鎖 斜の首と胴体に永遠の別れをさせようと実行しそうです」

「……それは止めてくれると助かる。流石に二度死ぬのは嫌だ」

因みに、僕も今浮遊していたりする。

地面のない下を見れば、見るも無惨なボロ雑巾みたいな格好になって死んでいる人間と、前部がひしゃげたダンプカーに慌てふためく人達がいた。

まあ、どつでもいいけど。

視線を鎌を持った女に向けると、濁った金色の瞳が僕を射ぬいた。
……何となく、気まずい。

「七鎖 斜」

「なんでございましょう」

暫しの静寂を切ったのは鎌を持った女だった。何故かフルネームで呼ばれた。

「七鎖 斜、あなたは今しがた死亡した事は理解していますね？」

「理解してる。ダンパーに轢かれたね、蛙の気分を味わった」

軽口を交えながら状況の分析、続行。

「理解できていればそれで十全です。では、七鎖 斜、端的に言いましょう」

僕の軽口を華麗にスルーしながら、小さく頷いて見せる女。僕を見据えた瞳は全く変わらずに、僕に向けて言葉を投げかける。多分その言葉を僕は、生まれ変わっても忘れないだろう。

それ程までに、衝撃的だった。

「あなたには、別の世界で転生してもらいます」

「転、生？」

あまりにあまりな言葉に、僕はアホな言葉を返してしまった。い
かん、思考がぶれた。

「そう、転生です」

無表情に頷く女、暫く続きの言葉を待っていても全く説明しない
のだから、多分あれで言いたい事の全てなのだろう。

その証拠に、長大な黒に黒を塗ったような鎌を天上に掲げて何やら
ブツブツ言っているのだ。何かするらしいのだがちょいまち。

「ストップ、ちょっと待て」

「なんですか？」

片手を突き出して制止を試みると意外にあっさり引いてくれた。

「まず、理由を聞こう。転生云々の理由を」

言葉の意味は分かるが、そんなゲーム感覚でできる訳でもあるま
いに。

いや、ゲーム感覚で宙に浮いてる俺が言うなって感じだがそこは気
にしたら負けだ。

「理由、そう、理由ですか」

僕の言葉が通じたらしく、天上に掲げた鎌を背中に担いで僕の瞳
をみつめてくる。実はちょっと照れてみたり。

「……理由を説明します。神界、あなた方と言う天国にて、私は死

者を黄泉に招く為に来ました」

いきなりの電波な発言。と言いたい所だが、今の僕には反論できる情報がないので素直に聞く。

「しかし、最近では神界にて神様が行う宝くじがありまして……たまたま、運良くあなたが当選したと言う事でして」

「……当選したら、どうなるの？」

「即時転生する権利と、転生する際の願いを三つ聞き入れ、神様が叶えてくれます」

……素晴らしい宝くじだな、おい。

思わず小さな溜め息を吐く僕を責める人はいないだろう。無表情に淡々と述べる彼女を見て、思考を再開させる。

転生、それはいい。理解した。

僕はもう死んでいるのは疑いようのない事実だ。身体半分透けてるし、どんな現象でこんな現実かは分からないけれども。

だが、願いを、三つと言うのが気になる。何処のドラゴンボールだ。

「……分かった。転生ね、それは分かった。けど願いを三つって、何でも叶えてくれるの？」

「はい。神様に関わる願いでなければ何でも叶います」

「……神様に関わる願い。例えばどんな願いはダメ？」

彼女の説明を聞いて確信した。やっぱり神様って神龍っぽいなあ、と。決して万能に願いを叶えたりできない辺りが。

「神界の神様になりたい、などは不可です」

女の説明を聞いて、納得する僕。そりゃそうだ、宝くじで神様になるなんて僕は嫌だけどそう言う奴もいるかもしれない　なら、そう言う決まりも作るのは有りだ。

「成る程、そんな感じの願いはダメ。か……」

かなり近く見える空を見上げながら思考を巡らせていると、首筋辺りに視線を感じた。誰かとは言いつまでもない。

「こんな状況に置かれても、驚かないんですね？」

僕は空を見上げたまま、太陽の光線に目を細める。

「驚く暇が無いし、僕の想像を軽く超える事が連続で起こってるんだ……受け入れるくらいしかする事がない」
嫌になる程青い空を見つめながら言う僕。

「……確かに、そうですね。不要な事を聞きましたね、忘れてください」

「そうするよ」

「では、本題に戻りますが……七鎖 斜。転生するに当たって、願いはありますか？」

小さく首を傾げながら問いかける彼女の姿は可愛かった。抱き締めてみたいけど、流石に空気を読んで自粛。

視線を青空から彼女に傾けて、思索する。別に願いなんて僕にはないのだけれど、せっかくだから何か一つくらい叶えて貰おうと思う。

何かないか、何か……。

「……あ」

唇を開いて声を発する。虚しく僕の声は空中で消えたけど、彼女は僕の声に気付いたらしく「ありましたか？」と聞いて来た。

「うん、あったよ。子供の頃に見た夢だけど」

小さく頷いてみる。鎌を持った彼女は、何やらホツとしたように胸を撫で下ろしているけれど、どうしたのだろう。

「では、願いをどうぞ」

鎌の先を再び天上に向けて、問いかけて来る。あの構えは儀式か何かのものらしい。

さて、余計な雑念はさておき、僕はほとんど思い付きで思いついた願いを言葉にする。期待半分、不安半分だけれど、やっぱり期待してしまう。

「僕の願いは、
『転生するとしたら僕は、魔法の世界で魔法使いになりたい』」

言葉を奏でた。彼女は、鎌を持ったまま少し驚いた表情になっている。

やっぱり、無理な注文だったのか？

「魔法使い、ですか？」

「うん。魔法使い、無理かな？」

問いかけに問いかけを返す。彼女は直ぐに無表情に戻っていたが、やっぱり驚いたような雰囲気が消えていなかった。

「……いえ、可能です。可能ですよ」

可能らしい。

「分かりました、魔法使いになる。ですね、承りました」

そう言つと彼女は、理由も聞かずに長大な鎌をゆっくりと振り始める。

空に絵を描くような動作で、ゆっくりと。

「我が名は“ライン＝ユーリア”神の御使いの命に従い、私の願いを聞き届き、叶えよ。」

我は神の御使い神の僕神の使い。我に 従え」

彼女が呟き終わった瞬間だった。僕の身体が光始める。

蒼い光だ。蒼い粒子が僕を中心に渦を巻くように天上へと上って行き、僕も天上に引つ張られる感覚に教われたが、直感で分かる。転生が、始まるのだ。

「次に目覚める時、あなたは魔法使いです。……願いは残り二つですが、次の世界で願いを聞き届けましよう。願いの有効期限は死ぬまでなので。」

「分かったよ。ありがとう、ユーリアちゃん、楽しい人生を歩めそうだよ。」

天上にゆっくりと僕の身体が引っ張られながらも、僕は彼女に言う。

けれど、楽しいと僕が言った瞬間に彼女の眉が一瞬跳ねた。直後に僕に向けて彼女は言う。

言いくい事を言うように、けれど、好奇心に負けた子供のよう

に。

「『楽しい人生』を、……一つ、聞いてよろしいでしょうか？」

「いいよ、なに？」

「なぜあなたは、そんなに死んだ人間のような眼をしているのですか？」

彼女の問いに、僕は微笑む。

多分、全く笑えていないだろうけど。

「人間としても、生物としても、僕は最初から死んでいるからだよ。」

別に今さっき死んだからこんな目をしている訳でもない。僕のこと

んな目は物心がついた時からだ。別に、今更どころとする必要のない目だ。

会う人会う人には、嫌な目だと言われるけれど。

「　　そうですね、必要のない事を聞いてしまいましたね。では、七鎖 斜。二度目の人生に祝福を　　……」

「うん。僕だって女の子だからね……二度目の人生は祝福にまみれて溺れてみたいよ」

そして、僕の身体は蒼の粒子に変わりながら天上へと昇る。

七鎖 斜の第二の人生の、始まりだった。

一話 く蒼の皇女く

緑色が支配する穏やかな空間、木々が立ち並び一見林のような印象を受けるものの、木と木の間いきちんと道は舗装され通路が出来ていた。

人通りの少ない通路には一つだけ、辺りの空間にそぐわない古びたベンチ。だが、そのベンチの上にも今は人がいる。

一言で表すのなら、蒼い少女が眠っていた。

流麗に流れ、地面にも届きそうな長い蒼髪。触れればそれだけで壊れそうな繊細さを出す陶器のような白い肌。

輪郭も人形のように整っている。太陽光に晒されて、ベンチの上で眠っている姿は、等身大の人形のような雰囲気さえある。

ベンチに座りながら眠ると言う器用な真似をしながら、暫し時間が経過すると蒼い少女の大きな青い瞳がゆっくりと開かれた。それだけで、場の雰囲気が変わる。

「……ここは？」

形の良い唇から女の子らしい、けれど、圧倒的に幼さに欠けた落ち着いた声音が辺りに響いた。

蒼い少女は、ベンチに身体を預けたまま周囲を見渡す。午前五時二十分。日曜日。

当然の如く、誰もいない。

「……ああ、転生の結果か」

暫くボーツとしたように辺りを見渡していたが、ふと思い付いたように思案する少女。

一言一言が、やはり冷めた声音だった。

ベンチに座りつつ思案しながらも現在の状況に大方の予想をたてる少女の前に、唐突に声が響く。

女の声だった。

「そのとおりですよ。七鎖 斜」

「……っ」

視線を自分の前、通路の真ん中へ向けると、またしても少女がいた。

腰まで伸びる鮮やかな金髪に、鈍く光る金の瞳 手には長大な鎌。

「……何分ぶりかな、ユーリアちゃん？」

七鎖 斜と呼ばれた少女は、直ぐに平坦な声音でたいした驚きもなくユーリアと呼ぶ少女を見やる。

「転生前の世界とこちらの世界には時間のズレが生じますので、神界時間から表しますと 三分と百一秒ぶりですよ」

神界は一分何秒の定義なんだよ。と問いかけた衝動に駈られるも、ぐつと我慢。話が逸れるのは面倒くさいと考えての我慢らしい。

「そうかい。……それで、今の僕は転生した結果、ここにいますと言
う訳でいいのかい？」

人形のように眉の一つも動かない少女はベンチに深く腰をかけな
おしながら目の前の金髪少女に訪う。興味からの質問と言うよりは、
社交事例で聞いてやってる的な意味合いの強い問いかけだった。

「その通りです、七鎖 斜。ご希望通りに魔法使いにもしておきま
した」

慣れ慕んだ自分の長い蒼髪を指先で弄ぶ様子は、成る程絵にはな
るが、自分から訪うておいて随分な態度の斜。

「それはありがとう。色々と後で説明は聞きたいけどね……ところ
でユーリアちゃん、君は何故此処に？」

指先で髪をクルクルとパーマにしながら、ふとした思ったような
声で疑問をそのまま言葉に発する。

質問した斜自身は対して興味が薄そうだった。

「……契約ですよ。あなたが願いの三つを言い、それを私が叶えな
い限りは私はあなたに従う形になります」

ユーリアの発言に、斜はうげ。と思わず声を漏らす。明らかに真面目そうな彼女に四六時中付き回されそうな予感がしたからだ。

「（……まあ、いいか。あんまり必要以上に干渉されなければ問題もない。今はそれよりも……）」

ベンチの前で立ち尽くすユーリアを見る。無表情だが、張り詰めたような無表情だと、斜は思った。感情を無理に押し殺す表情だとも 思う。

斜の性格上深くは詮索しないので、直ぐにユーリアの表情については忘れる事にする。今はそれより、最も気になる疑問がある。

それは 。

「で、僕はもう魔法が使えるんだろう？」

これだった。斜視点では、魔法とは人類の夢だ。

気にならないと言えば嘘になる。

その問いかけには、当たり前だが長大な鎌をブラブラと揺らすユ

ーリアが答えた。ふとした疑問だけど、その鎌は一般人に見られたら銃刀法違反に引っかけられるのではないのだろうか、と本当にどうでも良い事を考えた。

この世界に銃刀法違反があればの話だけれど。……見た感じ、斜が居た世界と全く変わらない。

閑話休題。

鎌云々の話ではなく、今は魔法の話だ。魔法が使えるか否かを、ユーリアに聞いたのだ。しかし、ユーリアの返答は、至極あっさりとしたものだった。

「使えるはずです。……けれど、その前にこの世界の事前知識を頭に入れて欲しい」

続けて、ユーリアは予め“この世界”の事前知識を彼女、七鎖斜に説明する。

魔法の定義、異世界から成り立つ世界、発達し過ぎた世界の末路、デバイスと言う魔法補助の存在から魔法を使う公務員染みた組織の事まで。

数時間に及ぶ説明を聞いて、途中から斜も飽きて話半分に聞いていたがそこでユーリアが言った言葉が斜の関心を捉えた。

「魔法って……いわば、超科学って意味なんだね」

魔法の定義である。

この世界における魔法とは、科学によって編み出され、作り出される兵器と言っても過言ではない。魔法≠科学、決して交わらないはずの矛盾である。

この世界ではその矛盾が成立しているのだが。

「その通りです。私もあまり詳しくは知りませんが、その魔法を使う補助する為に作られたのが……この、デバイスです」

そう言ってユーリアは左手をベンチに座ったままの斜に着き出す。ユーリアの左手には、青色のペンダントがあった。

「デバイス……これが」

引かれるように、斜はユーリアの手から青に輝くペンダントを手にとった。瞬間、ペンダントからの光が、強まった。

「ッ……！」

思わず、ユーリアと斜は目を瞑る。

目も眩む蒼い閃光はペンダントから発せられ、辺り一体を覆う程だった。
冷気さえ感じる蒼の閃光、未だ収まらない中で斜は確かに声を聞いた。

ユーリアの声ではない。脳に直接語りかけて来るように、誰とも知らない声が斜の脳を刺激する。

『 思い浮かべて。貴女の望む貴女の形。

貴女の使う貴女の魔法。

貴女だけの貴女の姿。

何の為に魔法を使うの？

蒼の皇女『レスタニア』は、貴女の魔法になる。

教えて、貴女の魔法』

「……………僕の、魔法」

蒼い閃光を瞼で感じとりながら、脳内に響く声を反復し、考える。

自らが望んで得る、自らの魔法を。

数分後、七鎖 斜とライン「ユーリアが居た広場である所に、直径五十メートルのクレーターが出来たらしい。

犯人は不明。しかし、目撃者の証言からは、クレーターの近くに二人の少女が居たと言う。

二話 く白い少女く

七鎖 斜は、とある一つの懸案事項を抱えていた。

享年十七歳、現在ピッチピチの九歳である所の斜には、親がいなければ家も無かったのである。

「……………これでどうやって生きていけと？」

財産は零。

手持ちも現在零。

モデルガンを持って戦場の最前線に送られた兵士の気分を味わった斜だった。

事の発端はユーリアだ。

あろう事かあの金髪幼女（人の事幼女とか言えないが）、これからの生きていく為に必要な金や食いぶちは自分で調達しなければならぬとほざいたのだ。

九歳の幼女に社会に出て働けと言うのか。

自慢ではないが、自分は社会に出ても二秒で社会不適合と称された女である。(生前談)

大体、この国では九歳の子供は働けない。とマク ナルドのジュースをストローで啜りながら考える。

場所は先程居た謎のクレーターが起きた広場から少し離れたマクナルド。

一人で、椅子に座って窓から広がる町並みを眺めている。

「大体、この世界って生前の僕が住んでいた世界と全く変わらないじゃないか……」

見知った建物。見知った生物達。見知った物質。見知った食物。何一つとして、生前と変わっていない。

「これじゃあ、ただ単に若くなって別な街に来たくらいにしか代わり映えがしないよ……全く、つまらない」

普通を自称する斜は、非日常な展開に期待が大きかった分、今の展開が不満で堪らない。

まあ、さっきの蒼いペンダントは色々と非日常で面白かったけれど。

「……………」

生気も覇気も、欠片すらない彼女の瞳に映るのはただつまらない街並みだけ。因みにユーリアは、この世界に置ける斜の身分と仮の親、住所の作成に出払っている。

どうやってそんな芸当をするのかは、神のみぞ知る　　と言つより、斜には興味がないだけだった。

ズコツ、と紙コップに入ったコーラも底まで飲み干す。退屈すぎて暇な斜。

「……………暇だなあ」

五分で見飽きた景色を一瞥し、空の紙コップを棄てようと椅子から立つ。流麗な蒼髪を静かに揺らしながら、出入口近くにあるゴミ箱へと近付いたのだが、ふと喧しい声が店内に響いた。

「だから、この子に謝ってほしいの!」

女の子の声だった。

面倒そうに視線をカウンター近くへと移す、今日は日曜日だからか割と混んでいるレジの前に、白い服が似合いそうな女の子と目付きの悪い数人の男達が口論をしている様子があった。

……………一瞬、喧騒に喧騒を重ねた明らかに周りに迷惑な大声に不快

を感じて店を出ようと考えるが、ふと思い直した斜は出入口付近から女の子と男達の口論を聞いてみる。

留まった理由は簡単、どうせ暇だし暇潰しに聞いてみよう。と言った考えだった。

「お嬢ちゃんさあ、俺達はただ、その子供が割り込んで来たから退かしたただけだって。変な言いがかりは止めてくれるかなあ」

二つのリボンで茶色の髪をくくった少女に上から嫌なニヤニヤ笑いで語りかける男。下手に髪を金色に染めているのが遠目からでも分かった。

因みに、その子供とは女の子の横で泣いてる五歳くらいの女の子の事だろう。

「だ、だからって突き飛ばす事はないと思うの！」

「……ああほら、お兄さんはね、この子供に教えてあげたんだよ。横入りしちゃ駄目だって」

必死に反論する少女に対して、明らかに面白がって相手している感じの男。ニヤニヤ笑いが斜には少し不快に感じた。

威圧するように少女の上から語りかける男の声は、やけに低く脅している感じもする。周囲の人達は、少女と男の喧騒など聞こえない

と言う風に他人を装おっていた。

明らかにチンピラとでも言う男達が怖いのだろう。

店員もどうすればいいのかが分からず、慌てふためいて右往左往しているのが出入口から見ても分かる。

しかし、誰も少女を助けに入ろうとはしなかった。避けられるような人垣の中で、少女は大きな瞳で男達を睨んでいた。

男は、未だ、笑っている。

「……いやしかし、お嬢さんは正義感が強くていいね。だけどさあ……」「おい！ 早くしろよ！」

諭すように語りかけていた男の声に被せて、金髪の男の後ろで待っていた仲間らしき男が怒鳴っていた。

周囲一体に静寂が走る。

「いつまでこんなガキに付き合っただやっただよ！ こっちは腹減ってたんだ、邪魔してんじゃねえ！！」

ニヤニヤ笑う金髪の男を押しして割り込み、女の子の胸ぐらを掴んで怒鳴る茶髪のいかにもなチンピラ風の男。

流石に女の子も一瞬黙りこんだが、直ぐに。

「じゃあ、あの子に謝ってほしいの！ あの子もごめんなさいってしたから、お兄さん達も突き飛ばしてごめんなさいってしてほしいだけのの！」

気丈に、言い返した。自分の数倍はある身長を持ち、大人でも怯む怒声を浴びせる男に向かって、胸ぐらを掴まれても決して引く事もなく。

「うち……うつせえ……！」

盛大に舌打ちする茶髪の男。
眉間に皺が寄りまくり、怒りの沸点がかなり低い事が丸分かりだった。

「なんでガキにんな事言われねえといけねえんだよ……！」

彼の怒りは臨界点突破しているらしく、少女の胸ぐらを掴んだまま上へ持ち上げる。重力に逆らって、自然と少女も持ち上げられ、足が地面に着かず、宙に浮いた。

「お、おい……さすがにそれはやりすぎ……！」

「うるせええ！ー！」

後ろの金髪男が笑顔を苦笑に変えて茶髪の男に制止を試みたが、怒鳴り声一つで黙らされた。仲間内で誰も彼を押さえこめる人がいないらしい。

「……私が間違っていましたって言えば許してやるぜ？」

圧倒的身体の実力差を理解しているらしく、下卑た笑顔を見せた茶髪の男。

しかし、胸ぐらを掴まれて持ち上げられ足が地に着かない少女の意思を込めた瞳は全く、揺るがない。

「謝るのは、あなた達なの！」

ブチン。と何かキレる音がした。

それと同時に、胸ぐらを掴まれて身動きがとれない少女の顔面に、容赦を無くした男の拳が叩き込まれる 寸前。

「うがッ!!!」

別の物が、茶髪男の頭にクリーンヒットした。見事な角度で綺麗に入った。それは、ハンバーガーやシェイクを乗せる時に使うトレイだった。

カランカランと、茶髪男への頭に特攻をかます一仕事を終えたトレイは床に虚しい音を立てながら落ちていく。

不意打ちで頭にくらって体勢を崩した茶髪の男も、予想外の展開に少女の胸ぐらを離し、床に落としていた。

「……いい大人が、女の子相手にマジで殴るのは引くものがあるね」

いや、殴るのは未遂で終わったのだが、かなりストレスなタイミングだったのは確かだ。

そして、見事なクリーンヒットを決めたトレイを投げたのは勿論、斜

い。出入口で見物していたのだが、何かの気紛れか少女を助けたりし

見事な一撃を貰った男は、頭を押さえて呻いてる。思いの他痛かったらしい。

「ほら、君もこんな無謀な事をするものじゃあないよ」

ツカツカと早足で歩いて床で腰を抜かした少女の手を引き、無理矢理立たせる。

茶髪男の仲間達は無事なはずだが、いきなりの展開に思考が固ま

って行動できずにいる。それは、知らない振りをしていた周りも同じだった。

しかし、固まって行動できずにいる要因は、それだけではない。

確かに、いきなりの乱入者に驚いた周囲の人達だが、それだけでは直ぐに思考を復活させて流石に何か行動を起こすだろう。

だが、現にチンピラ男達を含め周囲の人達は行動を起こせない。遠巻きにチラチラと見ていた人達も、事の発端の五歳くらいの女の子も、チンピラ達も、白い少女も。

斜の容姿に、目付きに、言葉に、雰囲気、呑まれて行動を起こせないのだ。

誰もが異質だと斜を恐れる。

誰もが恐怖だと斜を遠ざける。

誰もが皆、斜に関わる事を拒む。

自分は普通だと自称する斜。それは、斜にとっては普通で、周りにとっては異端だと言う事に、他ならない。

「あ、ありがとう……なの」

数秒の時間を要して、漸く思考を開始させた少女は、恐らくこの場においては少女一人であろう。

それは、少女も十分異端だと言う証明にもなるが、そんな些細な事には誰も気付かない。

「どういたしまして、かな。端から見ていてヒヤヒヤしたよ、B級ホラーを見ている気分だった」

砕けた調子で言う斜だが、声音に抑揚はなく、表情も眉一つ変わらない。

本当にヒヤヒヤしていたのかも分からない。

それでも、白をイメージさせる少女は年相応の、無垢な笑顔を見せる。

「ごめんなさい、なの。だけど、あの人達が……」

「正義感を発揮するのもいいけどね、力のない正義は正義にすらならないよ」

少女の手を引っ張って、然り気無く店を出ようと試みる斜だったが、若干出ていくのを渋る少女。

未だ固まっている女の子が気になるらしいが、斜としても別に気になる所がありすぎる。面倒になる前にさっさと退散を決めたいのだ

が。

「待ちなよ、おじよおーさん」

嫌に間延びした、不愉快な声音。

痛みからの復活を果たした茶髪男の声だった。眉間に一生消えなさそうな皺が寄りまくり、口元が引くついてる辺り、かなり頭に血が登っている。

「だから早く逃げたかったのに」

呼び止められれば、立ち止まるしかない。今、下手に刺激すれば完全にキレた男が何をするか分からない。

「大人げないとお兄さんも思っけどよお……今、産まれて初めて本気で人を殺したいと思わされたぜえ？」

少女の手を握ったまま、無感動な瞳で起き上がる男を見る。後ろで手を引かれる少女は、今の状況に固唾を飲んでいた。

「そうかい。人間じゃなくて悪いけど、そう言うイライラの発散は蟻にでもしてくれると僕は非常に助かるんだけどね？」

皮肉気味に言ってみるも。

「……やっぱ、ムカつく。何だお前、死人みたいな目えしやがって……イライラするんだよ……」

ジリ。と一歩歩み、近付く男。

然り気無く視線を周囲に向けるも、やはり助けしてくれるような態度をする人がおらず、斜は内心で舌打ちする。今の状況に焦っている訳ではなく、面倒な状況にうんざりしているらしい。

茶髪男の友人らしきチンピラ達も、キレた彼を押さえようと言う人もいない。

「あー、分かったよお兄さん。僕も流石にトレイを投げるのはやり過ぎかな？ ってミジンコ一匹分くらいは感じていたんだよ、って言う訳でたね」

魔法を使う訳にはいかないし、まだ加減ができない。

下手をすればこの店が吹き飛ぶ危険もある。

ならば、一番簡単な方法で現在の状況を打破すればいい。打破する為の鍵は、必ず店に来るのだから。

「うるせえ！ これ以上ごちゃごちゃ言っつてんとぶん殴るぞ！」

斜の言葉を遮って、近くにあったゴミ箱を蹴り飛ばす男。自然と、互いが互いに強く繋ぐ手を握り締めた 瞬間。

「何やってるんだい、きみ達？」

斜と少女の背中　出入口から扉が開く。
声をかけられたのは、斜達に対してではなく、今にも殴りかからんと顔を赤色に染めた男だった。

「っ、やっべ……！」

声をかけられたチンピラ達は、出入口に立つ男の姿を見た瞬間に、蜘蛛の子を散らすように店のレジに入り、裏口へと駆けて一目散に逃げた。

茶髪の男を含めたチンピラ全員が、だ。

「……助かったようだね」

「そつみたい、だね……あはは」

嵐の過ぎ去ったような感覚を覚えながら、手を繋いだ少女と共に後ろを振り返る。

そこには、青い制服を着こんだ警察官が立っていた。茶髪含むチンピラ達には、警察官に捕まる程の度胸は無かったらしい。

仁王立ちのまま、逃げていくチンピラを見ながら警察官の男は近くにいた少女二人に疑問を投げ掛ける。

「ところできみ達、この辺りで子供がチンピラに絡まれてると通報があつたんだけど、知らないかい？」

少女は苦笑で、斜は知らない。と答えたのは言うまでもない。

三話 　　く勘違い？

「いやはや、このケーキは絶品だね。これを毎日食べられるのを、僕は羨ましく思うよ」

マクド　ルドでの一件からの一時間後、斜は翠屋と云うこ洒落た喫茶店でケーキを頬張っていた。

雰囲気の良い、学生でも違和感なく入れそうな喫茶店である。辺りを見れば、部活帰りらしい女子高生などが談笑していた。

「あはは、そんな事ないけど、斜ちゃんが喜んでくれて嬉しいかな」

店の奥にあるテーブルで斜と向かい会って座るのは純真で無垢な笑顔を浮かべる少女。マクド　ルドであったゴタゴタで何だかんだで助けてしまう結果となった少女　名前を聞いた所、高町なのとは言うらしく、今いる翠屋と云う喫茶店はなのの実家らしい。

「……だけど、良かったのかい？　ただでケーキを食べさせてもらって、言うておくが、今の僕は無一文だよ」

モンブランをフォークで掬い、口に運ぶ。全く表情は変わらないが、それなりに喜んで食している。

「うん、助けてくれたからお礼したかったの。お父さんとお母さんに話したら、いくらでも食べていいって言ってくれたし」

テーブルに肘を着いてニコニコと笑うのはの後ろには、学生にケーキを配っているのは父と母の姿があった。

最初会った時は、異常に若い両親の容姿に驚いたが、今では落ち着いていたものだ。

「それならいい……って言うかありがたいけどね。実は僕、“家もお金もなくて困っていたし”」

あ。と声を洩らしたのは斜。次に、失言だったと内心で舌打ちする。

この世界ではお金は未だしも、家 すなわち住所が無ければ確実に怪しまれる。

その証拠に、今の失言を聞いたなのは表情は驚きのものへと変わっていた。

「……斜ちゃん、それは本当なの？」

身を乗り出すように斜と視線を交わせるのは。

どうにか誤魔化せないかと脳を回転させる斜だったが、最終的に

は誤魔化しようがない事を結果として導き出してしまふ。

今の失言を嘘だと言っても、なら家は何処だと言われればまた困る。この辺りの番地など、斜は知らないし家が存在しないのだから。

知ってるのは精々この街の名前くらいだった。

「……失言だったよ。まあ本当さ、僕には家がなくてね」

なので、これ以上情報を明かさない為になるべく低い声音で、何か複雑で言いにくい事情があるのだと察してくれるように演技しながら言ってみた。

「そう、なの……」

思惑通り、なののは聞きたい事情を気を使ってそれ以上踏み込んでこない。流石に数時間前に会った人間の暗い（となのはは思ってる）過去を聞き出すのは無神経だと思ったのだろう。

「まあ気にしなくていいよ、家の方は何とかなるらしいしね」

気を使ってユーリアが家も用意してくれればの話だが、まあ何とかなるだろうと呑気に考える斜だった。

「そうなんだ……、ねえ、斜ちゃん」

モンブランの最後の一口を口に含むと、名前を呼ばれた。モンブランの甘味が口腔全体に広がって大変美味。

「なんだい？」

なのはは、ジッと斜を見て、小さな唇をキュッと引き締めて小さな両手で斜の左手を優しく包む。体温が高く、暖かい。

「頑張ってるかもしれないけど、頑張って、ね……」

一体何を頑張るのか。と思ったがなのはの中で斜は、何かの事情で家を無くして親が不在の悲しい少女。との解釈を受けたらしい。

「あー、うん、頑張るよ」

頑張る気はサラサラないのだが、凄まじい勘違いをしたなのはをさらっとスルー斜の度胸も中々に凄い。罪悪感とか沸かないのだろうか。

そのまま翠屋で計二十皿のケーキ類を遠慮の欠片無く食べ尽くして、昼時になって店が混み始めた辺りで斜は退散する事にした。流石に丸一日翠屋で過ごすつもりもない。

「じゃあ、そろそろ行こうかな。混んで来たみたいだしね？」

その事をなのはに報告すると、何やらレジにいる父に向かって駆け出し、父と会話するなのは。

帰ろうかとも思ったが、世話になったので無言で帰るのも忍びないと考えた所で、なのはが斜の元へ戻って来た。

後ろに両親を連れて。

「斜ちゃん、これ、持って行きなさい」

嫌に優しい声音なのはの父が気持ち悪かった。なのはの母が、斜の前に出てケーキの入った箱を渡す。

渡されたのは、パーティーにでも使うのかと思う程の、かな

り巨大な箱。

「あ、ありがとうございます……」

一応お礼を言う斜。

しかし、お礼の際になのはの両親を見た瞬間にぎよっとした。

涙目なのだ。なのは含めた三人が。

「強く、生きるんだよ……」

「何か会ったら翠屋に來なさい……大丈夫、お金はとらないわ」

と、言うのだ。

その言葉でピンと來た。先程、なのはに行つた陰のある過去があつて家がないけど大丈夫みたいな態度をしたのが原因なのだろうと予想する。

そして 多分それは、大当たりだつた。

「……皆さんのおかげで、強く生きていけそうです」

話会わせないとマズイかなー。と入らない気を入らないタイミングで取る斜である。

若干棒読み臭い台詞で言った瞬間に、涙腺に限界が来たっぽいなのは母親が踵を返して店の奥へ退散してしまった。

……感情移入しすぎだろう。と思ったのは他でもない斜だった。

「では、ケーキ、ありがとうございます」

これ以上翠屋に居るとボロを出しそうなので、割と重いケーキの箱を持って店を出る。

背中越しに「また来てねー！」と聞こえたなのは声には軽く手を上げて応えておいた。

四話 〱図書館〱

翠屋を出てからの数時間を、斜は途中で見かけた図書館で過ごしていた。

わりと大きい図書館で、様々な本があるので、この世界での情報が色々収集できるであろうとの考えだったが、一番の目的は暖かい室内でまったり過ごす為である。

因みに貰ったケーキは、三十分で完食。甘い物に入る胃は別空間なのだ、とは斜の言い分。

そんな斜は、一冊の分厚い本を読んでいたが最後の頁を捲ると同時に本を閉じた。

「……やはり、前の世界と何も変わらない」

図書館と言う事も考慮し、小さくため息を溢す。

斜が調べたのは、日本の地名についてだった。

「此処、海鳴市は存在するが僕の住んでいた地域が存在しない……、フフ」

斜が今居る海鳴市は、図書館の本とインターネットを駆使すれば簡単に情報が溢れ返っていた。が、生前、斜が暮らしていた地域は存在しなかったのだ。地域も県も、何の情報も無かった。

「異世界確定……かな」

斜は、生前での世界と現在での世界は、一種のパラレルワールドだと考えている。生活感や、人種が非常に類似した、別な世界。その答えが一番斜が納得できる。

なので、誰に合否を訪ねる事もなくそれが真実だと思う事にした。別に真実を知りたい訳ではない。自分にとっての答えを知りたいだけだった。

「……さて、これからどうするか」

静かな図書館の中で、再び小さく呟く。一人言が多いのは斜の癖で、更に言えば考えがそのまま言葉にしてしまうのも悪い癖だ。

斜は、身体を沈めていたソファから腰を上げて手に持った分厚い本を棚に戻した後、文庫、新書コーナーへ足を運ぶ。

夕暮れまで時間があるので、情報収集も一段落着き、簡単な本でも

読んで図書館で時間を潰すつもりだった。

「……知らない本ばかりだな」

常に一人だった斜は、暇潰しに本を読む機会が多かった。なので、大概の本は既読済みが多かったのだが大きな本棚に並ぶ様々な本は、知らない本しかない。

「……ふむ」

小さく息を吐きながら、ある本の前で立ち止まる。

視界に入ってタイトルが面白いのでこれを読もうと手を伸ばした瞬間 別の手が、二つ同時に同じ本に重ねられた。

「ん？」

ついでに声も重なった。

「あ、すみません」

慌てて手を離したのは、相手だった。やけに低い位置から声がするなど視線を横に向けると、そこにいたのは少し茶色が混じった髪でショートカットが似合う車椅子の少女。

「ああ。いえいえ、こちらこそすみません。あ、この本どうぞ」

同じ本に手を伸ばしていたのを察し、本棚から件の本を取り出して車椅子の少女へ差し出す。適当に選んだ本だから愛着もない。

だが、差し出された本を見て、ブンブンと見てる此方が申し訳なく思うような勢いで車椅子の少女は首を振った。

「あ、そんないいですよー。うち、それ一回読んだけど気紛れにそれよもー、思っただけやから」

やけに明るく言う車椅子の少女。口調から見ると関西人のようだが、この場ではあまり関係ない。

差し出した本の受け取りを拒否された斜は、彼女の言い分を聞き

て本を引っ込め、片手に持つ。彼女はそれを見て「それ、おもしろいよー」と声をかけてくれた。

「そうなのかい。タイトルが変わってるから取っちゃったんだけど、アタリかな？」

片手に持った本の背表紙を眺めながら二人は自然に会話を始めた。同年代の女子で、更に車椅子の少女の人当たりが非常に良いと言うのも理由があるのだろうが、二人はまだこの時点では知らない。

この出逢いが、予め設定されていた運命をねじ曲げ、二人の運命を含めた周囲を決定的に変化させる事を。

「それでなそれでな、主人公が言ったんや『俺から変態を取るなんて所業は世界から核を廃棄させるくらい不可能なんだ！』ってな！。

「かっこいいとおもわへん?!」

「……ウン、カッコイイネ。思わず警察に通報しそうなくらいだよ」

漫画のような展開で出会いを果たした車椅子の少女（名前は八神はやてと言っらしい）と、斜は図書館のソファで楽しく談笑していた。

基本的に喋るのははやてで、斜は相槌が主なのだが斜の相槌も何処か本筋から離れて行きがちなので、はやてにとっても楽しいらしい。

「やっぱその本最高や！ アタリもアタリ、大アタリや！」

「うん。もうこの一時間で僕の持つてるこの本の始まりから結末まで重要な所や些細な台詞まで事細かにネタバレされたけれども、アタリな本みたいだよ……イヤー、ヨムノタノシミダナー」

胡散臭い片言で言葉を交わしている内に、外は夕日で染まっていた。後二時間もすれば閉館時間となる。斜も、今手に持つてるこの本を読もうと言う気にはならなかった。

「……ところで、はやてちゃん。君は家に帰らなくていいのかい？
もうかなり話込んだと思うんだけど」

打ち明けると、斜も異常にテンション高く会話を切り出すはやてに疲労感を感じ始めていたからこそその提案である。
一時間でマクド ルドの一件より体力を消費したかもしれない。

「あ、そやさそや、人待たしてたんやつたー！」

図書館の中央に飾られた時計を指指してやると、思い出したように叫ぶはやて。その際に声が大きく、周りの人に睨まれたのは自業自得だった。

「じゃあ、送っていくよ。どちらまで？」

内心で苦笑しながら、ソファから立ち上がり車椅子のはやての後ろに周り混む。何だかんだで時間も潰せたので、お礼だと斜は言う。

「せやな、ありがとう斜ちゃん。……図書館の出入口辺りに居る思うけどなー」

了解。と周りに配慮しながらゆっくり車椅子を押す。
意外と重かったのは、斜だけの内緒にしておいた。

図書館の規模が大きい事から、利用する人数も多く、勿論出入口も大きいと言う訳だが、閉館時間も迫った図書館の出入口にはあまり人がいなかった。

斜がはやての車椅子をゆつくりと押し、はやては出入口の近くに立っている二人の女子と女性に干切れそうな勢いで手を振る。

中々、街中ならば確実に目立つ二人組だった。

「……待ち合わせって、外国人？」

「うーん……まあ、そんな所や。みんな、良い子やで？」

若干言葉を濁すはやてに疑問を覚えたが、そこは七鎖 斜、直ぐに自分には関係無い事、と区切りを付け、今の疑問を忘れて車椅子をゆつたりとした調子で押す。

手を振って存在をアピールするはやてに気付いた外国人っぽい二人組は、あちらからも近付いて来た。

「おせーぞ、はやて」

最初に話かけて来たのは、二人組の一人である所の女の子だった。赤髪を三つ編みにし、二つに分けた少し生意気そうな雰囲気を持つ女の子。年は同じぐらいだろうか？ と内心で値踏みする。

「まあまあ、ヴィータちゃん」

そして、赤髪の女の子をヴィータちゃんと呼びながら宿めるのは、目が垂れ気味で温室のお嬢様ですと名乗られれば納得しそうな、落ち着いた金髪の女性。

何となく、苦労しそうな人だなあ。と斜は思った。
彼女への第一印象である。

「ごめんなー、ヴィータ、シャマル。ちょっと時間忘れて話込んだんや」

ヴィータ、シャマルと呼ばれた彼女達は笑顔ではやての謝罪を受け入れた。家族とも言えるような雰囲気、少し気まずい斜。

「……あの、それではやてちゃん。そちらの方は……？」

いたたまれない感覚を覚えて、静かにその場を立ち去ろうかと考

えていた斜だったが、その前に斜に注目が集まった。
赤髪の女の子と、金髪の女性の視線が斜の顔面に突き刺さる。

「ああ、そやったな。こちらは斜ちゃんだなー、ウチと話が合おう
てさっきまで話こんでたんよー」

「そうだったんですか、私はシャルマルと言います」

「……………」

先に挨拶したのは、穏和そうな笑顔を浮かべるシャルマルだった。
丁寧に上半身を畳んで挨拶をするので、斜も軽く会釈をして返す。

ただ、もう一人の女の子　ヴィータと言う赤髪の少女は名乗ら
なかった。

ただ、好戦的な鋭い目付きで斜を睨む。

「こら、あかんでー、ヴィータ？」

ヴィータの剣呑な雰囲気を感じ取ったのだろう、はやてが一番に
ヴィータに優しく注意する。すると、ヴィータも少し気まずそうに、
だが鋭い視線は決して和らげずに、呟いた。

「……………よろしく。ヴィータだ」

「うん、よろしく。僕は七鎖 斜だよ」

挨拶を返し、ここで微笑みでも浮かべれば友好的な印象を持たれるだろうが、斜の頬の筋肉は全く活動せず、無表情を貫いていた。

「……あ、そうや！ なあなあ斜ちゃん、せつかくやし、ウチの家でご飯食べて行かへん？」

はやての頭頂部に視線を注いでいた斜だったが、突然の提案に驚く。一瞬返答に困り、次いで言葉を紡ごうとした瞬間に別な声がつ遮った。

ヴィータとシャマルだった。

「は、はやて！ 別にそんな奴誘う必要ねーよ！」

「そ、そうですよ、はやてちゃん……その人にも都合があるかもしれませんし」

「え？ 別にこの後予定ないし、誘ってくれるなら凄く助かるけど」

やけに焦っているような声音のヴィータとシャマル。シャマルはチラチラと斜を見ながら遠回しに帰れ。と言外に告げ、ヴィータはあからさまに嫌そうな表情で拒否していた。

普通の人ならば二人の態度で怒りや不快を覚えるであろう。だが、斜は並みの神経をしていない。

彼女達が嫌がっているのを理解しつつも、完全に無視してはやての誘いを受けたのだった。

「ほな、決まりやな。ふっふっふー、腕がなるでえー！」

と、ヴィータとシャマルの密かな思惑を知らないはやてと斜は、呑気に雑談を開始するのだった。

話　　〜ヴィータ〜

ヴィータ

はやてが遅い。

三十分前にはやてを迎えに図書館に着いたけど、まだはやては待ち合わせの出入口に来ていなかった。アタシは、出入口の近くにあった質素な椅子に腰かける。一緒に来たシャマルも、隣に腰かけた。

「……………なあ、シャマル」

はやてが来なくて暇だから、シャマルに話かけてみる。

「なあに？　ヴィータちゃん」

ニコツと笑うシャマル。時々叔母さんみたいな笑顔だなあ。とアタシは思う。

シャマルに言ったら怒られるけど。

「……今、闇の書の頁は何頁くらい集まった？」

アタシが問いかけた瞬間に、シャマルは笑顔を引っ込める。……
話題の選択を間違えたかもしれない。

「四百頁くらいかしら……まだまだ、足りないわ」

四百頁。まだ半分もいつていない。

「……急がないとな」

自分で呟いて。気を引き締める。

闇の書を一刻も早く完全させないと、はやてが……！

「実際、私、思うのよ。はやてちゃんはまだ子供なのに、闇の書の
主に選ばれて……酷な運命に翻弄されてる」

唇を噛む。シャマルは、視線を綺麗に清掃された床に向けていた。

「だから、アタシ達が運命をぶっ潰すんだろ。はやてを……闇の書

の餌食にさせない為に」

やっぱり、言うんじゃなかった。と心の中で後悔する。
どう転んでも、闇の書にまつわる話は重い空気にしかならない。

「あ、ほらヴィータちゃん、はやてちゃん来たわよ」

アタシが難しい顔をしていたのに気付いたシャルが笑顔で、
「笑って」と呟いた。

……そうだ。はやての前では、笑顔でないと。

「……うん」

よし、大丈夫。アタシは大丈夫。きちんと笑える。

小さく頷いて、こっちに近付いて来るはやてに視線を向けた 瞬
間に、顔が固まったのが理解できた。

「……待ち合わせって、外国人？」

そうはやてに呟きながら車椅子を押すのは、ガキだった。多分はやてと同じくらいだと思う。ただ、それはいい。別に気にしない。図書館で仲良くなった子供かもしれない。

はやての車椅子を押すガキは、蒼い髪と人形細工みたいな容姿が目立つ女の子だった。人形みたいな無表情で言葉を紡ぐアイツは、言葉を喋る人形にしか見えない。

“ 生きている人間に見えない”。

横目でシャルマルの表情を盗み見る。
アタシと同じで、表情が固まっていた。多分、アタシと同時に
気付いたんだ。

あのガキから見える、視認できる程の“ 蒼い魔力” に。

「（……どう思う？）」

はやて達に気付かれないようにシャマルに念話で問いかける。あ
のガキの名前は、七鎖 斜と言っらしかった。

「（……異常。としか言えないわ。だけど一つだけ確信できる
あの子、魔導士よ。かなり強いと思う）」

「（闇の書の主って理由ではやてを狙ってんのか……？）」

訝しげな目付きになるのを自覚しながらアタシ達は、念話を続け
ながらシャマルが斜とか言うガキに挨拶していた。

「（……分からない。だけど、油断できないわ、あの子の企みが全
く読めないの）」

斜とか言うガキと目が合った。アタシは、眉ねを寄せて睨めつけ
てみるけど、アイツの表情は全く変わらない。

「こらー、あかんで、ヴィータ？」

斜とか言うガキを睨んでいたアタシだったけど、はやてから名前
を呼ばれて我に返った。全くはやての言葉が耳に入っなくて、何

に大して不満そうにしているのかが分からなかったけど、シャマルがはやての死角からアドバイスしてくれた。

斜とか言うガキにアタシが名乗らないから注意したらしい。

「……よろしく。ヴィータだ」

「うん、よろしく。僕は七鎖 斜だよ」

アイツは無表情に、アタシは睨みながら、お互いに、挨拶を交わすけどアタシは一瞬も気を緩めない。アイツが何かしようものなら、直ぐにぶっ潰す準備はできてる！

「あ、そうや。なあなあ斜ちゃん。せつかくやし、ウチの家でご飯食べて行かへん？」

はやての言葉を聞いて、一瞬頭が冷えた。

待ってくれはやて、アタシはそいつと晩御飯何て食べたくない。それはザフィーラやシグナムに聞いてもきつとアタシと同じ意見だ！

慌ててアタシはアイツが何か言う前に拒否の言葉を言うけど、はやては聞いてくれない。

いや、はやての言い分は正しいけどソイツは 。

ソイツは、何か、危険だ ！

「ふっふっふー、腕がなるでー！」

手をグルグル回すはやてに見えないように、溜め息を吐く。結局、晩御飯に呼ぶと言つはやてを止める事ができなかった。

「（………）ヴィータちゃん。一応シグナムとザフィーラに連絡とっておくね（）」

アイツとはやてが雑談し始めた頃を見計らって、シャマルが念話をとばして来た。シャマルにだけ見えるように小さく頷く。

シャマルは、はやての車椅子を押して外へ行くこととするアイツを

然り気無く遮って、はやての車椅子を押し始めた。

シャマルなりの、アイツに対する気遣いかもしれないし、これ以上はやてに近付けさせるのを止める為の抵抗かもしれなかったけど、聞くのは止めておいた。

「……………」

斜とか言うガキを横目で盗み見てみる、何処か、哀しそうに、寂しそうにシャマルとはやてを見ているように見えたのは、アタシの気のせいだろうか。

五話 友達

時刻は十七時五十分を過ぎた所。七鎖 斜は、見覚えの薄い歩行者専用道路を歩いてた。

いつもならば一人で歩くのが常だが、今は違う。図書館で出逢ったはやとシヤマルが前を歩き、その後ろにヴィータと言う赤毛の少女と斜が並んで歩く、と言う順だった。

「ふうん、この辺りはこうなってるんだね、ヴィータちゃん」

「……ああ」

田舎から都会に訪れた田舎者よろしく、キョロキョロと世話しく辺りを見回す斜に、素っ気ない態度で返事だけするヴィータは、端から見れば仲の悪い友人同士が嫌々一緒に歩いていると称したであろつ。

実際に、ヴィータは斜の事を毛嫌いしているフシがあった。斜にもその事は気付いているが、あえて口には出さず自ら色々な話を振っていく。

ほとんど「ああ」「や」「そうだな」と返事されるだけだったが。

「一つ気になるんだけど、いいかな？」

図書館に出てから、ずっと話かけていた斜だったが、初めて質問を投げ掛ける。

話半分に聞いていたヴィータも少し興味が出たのか、視線を向けられた……やはり、睨まれたが。目付きが悪いらしい。

「はやてちゃんって、足が悪いの？」

問われた質問に、ヴィータは即答する事が叶わなかった。

はやての足が悪い理由、表向きは“原因不明”となっていたがヴィータ達は裏の理由を知っていたからだ。

「……初対面の人に聞きにくい事を聞く奴だな」

だから、質問には答えずに斜を睨む。斜にしても、あまりない気を使っていたのはヴィータも感づいた。

無神経で、純粹な好奇心で知りたいと思うならきつと本人に直接聞くだろう。その辺りの配慮はできるのか、とヴィータは少し意外に思ったのだが。

「うん。図々しいってよく言われるよ」

我ながらそう思う。と自分で毒づく斜。隣で歩くヴィータは疑わし気な視線を向けていたが、暫くの無言を保ちながら歩いていると、口火を切ったのはヴィータだった。

「あー、そうだよ。はやては足が悪い。ずっとそうだ、アタシ達と出会った時からもう車椅子で生活してた」

気まずい空気、と言つのが苦手なヴィータだ。両手を持ち上げて後頭部に当てながら面倒そうに言ってるように見えるが、表情は明らかに沈んでいるのが見えた。斜も、流石にこれ以上は踏み込めないと考える。

「……………んじゃあ。次はアタシからの質問だ、黙秘は認めねえ」

はやてについての事情を非常に簡潔に説明した後、更に声を潜め 恐らく、はやてに聞こえないように配慮しながら今度はヴィータが質問を投げ掛ける。斜は、「答えられたら答えるよ」と返事をした。

「……………お前は、はやてを狙ってんのか？」

ヴィータにとって、質問には大した意味がない。

これは、一種のカマかけだ。狙う。と言う言葉でどう反応するか 反応をどう抑えようとするか 、それを見極めるつもりだった

のだが、斜は予想の上に行く。

正確には、斜め上に。

「残念ながら、はやてちゃんはおくの守備範囲から離れてるんだよ……最低後五年は育ってくれないと食べがいがない」

と、いきなり自らの顎を押さえてぶつぶつ呟き始める斜。ぶつぶつ呟きながら無表情を保つ様は、非常にシニールに見えたのは仕方ない。

いや、それよりも。

「……まで、何だ。食べる？ はやては食べ物じゃねーぞ？」

斜の発言に疑問符を浮かべる少女が一人。そっち系の知識は皆無らしく、口は悪いが無垢な少女らしかった。

「……成る程、よしヴィータちゃん、僕が食べるって言った意味はだね」

知識のないヴィータが首を傾げながら考える様を見ていて、嗜虐

心が芽生えたのだろうか、口元を歪に、しかし鼻から上は無表情と言う実に器用な表情を作り出しながら、唇をヴィータの耳元に持っていく。

二人の話を聞く者がいるとは思えないが、小さな手を唇の横に立てながら、内緒話をするように。

「……で、……それで……　　なんだよ」

耳元で囁かれたその後のヴィータの行動は瞬神の称号を勝ち得ても構わない程に速かった。

「じ、このっつ」

事細やかに紡がれた、恐らくはいらないであろう知識にヴィータは困惑し、意味が理解できた頃には耳まで林檎のように赤く熟れる。

しかし、流石は闇の書の守護騎士として名乗っているだこの事はあり、直ぐ様上半身を捻り手を拳の形に作り上げ、耳元で放送禁止用語に間違いなく引っ掛かるであろう言葉を囁く斜の腹部に、ほぼ全力で拳を叩きこんだ。

「……いい、パンチじゃないか……!!」

ぐふう。とか言いながら腹部にくらったフックに崩れ落ちそうになるも、足を踏ん張り堪える。

ヴィータはまだ顔が真っ赤だった。大人の階段を一步上った証拠である。

「ヴィータも斜ちゃんも、仲が良くなったなあ」

と言ったのははやて。しかし、当の二人にははやての声を聞いていない。

車椅子を押すシャマルは、ほのぼのした笑顔を見せる主に苦笑を浮かべるしかなかったと言う。

「は、話を戻すぞ」

「まだ始まってもいなかったけどね」

仕切り直しとばかりに咳払いをするヴィータの耳は、未だ赤く染まっていた。茶化してみたが凄く鋭い目で睨まれた。

「んで、だ。……お前、本当にはやてを狙ってる訳じゃあないんだよな？」

再度、同じ質問を投げ掛けて反応を伺うヴィータだったが、斜は何時ものように無表情で考えが読めない。

「……茶化さずに答えると、うん。狙ってないよ、はやてちゃんって、何か言い様のない“力”を持つてる。……ヴィータちゃんは、僕がその“力”を狙ってはやてちゃんに近付いたんじゃないかって心配だったんでしょう？」

驚いた。横側で歩く斜は、一度の質問でそこまでくみ取り、答えを用意していたのだ。

だが、やはり驚くべきは洞察力。今日出逢ったばかりのはずであるはやてと少し関わっただけで、はやての持つ“力” 闇の書の存在に、気付いたのだ。

「……何で、分かった。はやてが普通じゃない力を持つてること」

やはりこの女は油断ができないと、ヴィータの心中に現れたのは、
疑惑。

“力”に気付いていれば、その巨大さも分かるだろう。なら、その時に取る人間の行動はヴィータの経験上二つある。

力を利用しようとして、主に近付くか。

力を恐れて、主から離れるか。

ヴィータの見た限りでは（無表情で確証は持てないが）、どちらかと言えばはやてに近付いている時点で前者だと予想していた。だが、“力”を利用とする人間特有の野望に満ちた瞳が斜にはない。

瞳に映るのは、死者のような色だけだ。

「……僕、友達がいなくてね」

思案に没頭していたせいなのだろうか。

危つく、小さく語り始めた斜の声を聞き逃す所だった。

「だから、まあなんと言うかね。……はやてちゃんなら、友達にな

ってくれるかなあって」

切実な願い、だった。

何処か遠くを見つめる瞳は、何処か死んでいて 希望を映していた。

野望の瞳じゃあ、ない。
希望を望む者の、瞳だ。

昔の、はやてに出逢う前の自分のような。

「……けっ。バカじゃねえのかっ」

だからこそ、ヴィータは毒づく。頬を赤くしながら、斜の顔を見ずに、はやてとシヤマルを見ながら、言う。

「はやてが、お前と友達になりたがらないって、思ってたのか？」

きつと、ヴィータの照れ隠しだろう。
少し、素っ気ない口調になったが、斜には言葉の意味と、ヴィータの思いやりが伝わった。

「……そうだと、いいなあ」

だからこそ、優しい赤毛の、小さな守護騎士に向けて。

ほんの少し、笑ったのだった。

六話 八神家

七鎖 斜は、ある家の前で立ち尽くしていた。

少し小さめの、家を模したような屋敷で十人くらいなら軽く宿泊できそうな家だ。そして、その家は、八神 はやての自宅だった。

「……はやてちゃんって、実は金持ち？」

小市民の斜にとっては、少し大きい家に住んでる「金持ちの定義」が結びついている。横を通り過ぎて、何事もなく家に入ろうとしたヴィータの腕を掴んで引き留めて質問してみた。

「それでもねーよ、何かはやての支援者が保護者が知らねーけど、毎月お金送って来るみたいだぞ」

友達云々の件を明かしてからは、警戒レベルを落としてくれたヴィータである。

だからと言って家庭の事情を簡単に話してしまう辺りは、下げすぎ感はない。

「……そうなんだ」

一言呟いて、ヴィータの細い腕を離す。説明に、引っ掛かる所はあったが流石にはやてに「ご両親いるの？」とか聞けない。最近空気を読む事を覚えた斜だった。

「んじゃ、行くぞ」

ヴィータが先導して、家の中に突入した。

「……ごめんなさい」

玄関の扉をヴィータが開けた瞬間に、条件反射で謝罪してしまっ
た。

しかし、それも仕方ない。玄関の扉を空けた直後、靴置場に人が居
たのだ。ピンク色の髪を後ろで高くくくり、いかにも目付きの悪い
女性 守護騎士が一人、シグナムが。

「ヴィータ、遅いぞ。……その私に謝罪してきた女の子は誰だ
？」

腕を組んで仁王立ちしているシグナム、目付きが鋭い事も手伝って非常に威圧感を放っている。ヴィータは戸惑いもせず、慣れるとでも言いたそうだった。

「あー、はやてが図書館で知り合った奴。夕飯誘って此処に来た」

説明適當すぎるだろう。と思う斜だが言葉を発する事ができない。シグナムが、鷹のような鋭い瞳で睨んでいるからだ。

「……七鎖 斜です。今日は、はやてちゃんに誘われ「魔導師が、此処に何の用だ」

声を被せたのは、シグナム。挨拶をしようとした矢先の質問だったので、理解が追い付かず少し呆けてしまった。

ヴィータが斜を魔導師だと説明する暇は無かったし、斜も自分が魔導師だと名乗っていない。ならば、何故？ と疑問に感じたが、直ぐに解けた。

「それだけの魔力を目の前で見せつけられて、気付くなと言う方が無理だ。……だが、成る程魔力認識障害のプロテクトが組み込まれているな」

勿論、ヴィータやシグナムのように自分の“蒼い魔力”を視認できない斜は首を傾げるしかない。

「何の用って、はやてちゃんに夕食を誘われたから来たのですが」

シグナムの加減無い敵対心による威圧を受けながらも、丁寧に答える。

「……魔導師であるお前が、か？ 主はやてに何かしてはいまいな」

此処まで露骨に敵対心を晒されると、いつそのこと清々しい。何となく、シグナムに好感を覚えながら斜は言う。

「してませんしできません。大体、僕が魔法を扱ったのは朝にちょっとしたのが初めてです」

何でも無さそうな斜の発言に、一瞬静寂が訪れた。

「……ちよつとまで」

そして、静寂を破ったのはヴィータ。斜の肩に手を置いて、シグナムを無視して無理矢理振り向かせて呆れたような怒ってるような微妙な顔がヴィータの顔面に映し出されていた。

「お前、今まで誰かと闘った経験とかないのか？」

「ない」

「魔力を増幅させるデバイスでも持ってんのか？」

「持っていない。……多分」

「魔法を今まで使った事がないのは、真実なのか？」

と、最後だけシグナムが背中を見せた斜に訪う。

「ありません。僕も訳有りの身でしてね」

シグナムの質問には、捕捉を付け加えて即答した。

“訳ありの身”と聞いてシグナムの臉が一瞬動いたが、誰も気づかない。

「……そうか、分かった。主はやての客人なら、私達にとっての客人だ。上げれ」

暫くの沈黙後、現代に生きる騎士のような振る舞いで踵を返し背中を見せながら語るシグナムに、斜は密かにベルサイユの薔薇を思い出したと言う。……いや、何故か。

「びつくりしたぞ、まさかシグナムの入室許可が降りるなんてな」

驚きの声を上げるヴィータ。玄関先で、シグナムが廊下の奥の部屋に消えて行ったと同時に憑き物が落ちたように語る。

「お前みたいなの、見るからに得体の知れない奴なんかぜってー追い返すと思ったのに」

その言葉に、斜もムツと唇を尖らせる。普通を自称する斜にとっては、得体の知れないと言う言葉は不名誉なのだ。

「僕から見れば、君達の方がよっぽどだよ。本当に騎士のようだ」

皮肉気味に言ったつもりだったが、皮肉になってない事に気付いた頃にはヴィータは少し嬉しそうな顔で。

「当たり前だ。アタシ達は、はやての守護騎士なんだからな」

「ほな、挨拶しよかー」

靴を脱いで、玄関から続く廊下を歩くと直ぐにキッチンがあり、割と広めのキッチンの中央には大きい食卓が置かれ、また食卓の上には様々な料理が置かれていた。そして、食卓の前に座るのは五人。

真ん中に家長こと八神 はやて。

はやての右側にはシグナム、左側にはシャマル。

はやての向かい側に座るのは、斜で、斜の右側に座るのはヴィータだった。

因みに、ザフィーラと言う妙に大きな犬はシャマルの横で餌を食

べている。

「いただきます」

丁寧に、食事の挨拶をする皆。それから、和気あいあいと団欒家族のように口々に会話しながら食事を進める。

「せや、誘つといてなんやけどな。斜ちゃんはお家の人に連絡とつたん？」

と、唐突に今思い出したかのような調子のはやてに、斜はどう答えるか返答に困った。九歳と言う年齢上、保護者が存在しなければマズイのだが。

「必要ないよ。僕に家族はいない」

しかし、斜はこれ以上キツパリと保護者や家族の存在を否定した。シグナムやヴィータと言った面々が情報を得ようと聞き耳を立てていたから正直に話した所もあるが、斜の見た限り“この八神家も”何かしら訳ありなのだから、面倒な事にはならないだろう。と言う考えだった。

「戸籍はあるけどね、家はない。実を言うと、今日ご馳走してもらって助かってるんだよ」

自らの素性を暴露してみる斜は、それとなく皆の反応を伺っていた。

ヴィータは、少し気まずそうに。

シグナムは、何時もと変わらず平然と。

シャマルは、少し同情するような眼差しで。

ザフィーラは、変わらずご飯を食べて。

はやては、泣いていた。

「は、はやてちゃん？」

食事中にいきなり大粒の涙を溢されれば、誰だって驚く。証拠に、シグナム達も少し驚いたように自然をはやてに向けていた。

「斜ちゃん、それ、本当なん?!」

斜にとっては、更に驚くべき事に、いきなりはやてが威圧するよ
うにプレッシャーを放ちながら真偽を訪う。

もうはやてに周りは見えていないらしい。

「ほ、本当だけど……」

あまりの勢いに気圧されてしまった。若干引きながら、身を乗り出すはやてを横のシグナムとシャルマルが心配そうに見ていたのは余談。

何だろう、はやての雰囲気が変わって凄く怖いと感じる斜。

「……、斜ちゃん。両親はいるん？」

両親の顔も見た事がないので、首を横に振る。

「保護者は？」

「いる……らしいけど、正直顔も知らないし名前も知らない」

何故ならユーリアが対処しに行ったり戻って来ないからだ。待ち合わせ場所のはずのマクド ルドから移動した斜が全面的に悪い事には気付かない。

「そうなん……」

一頻りの質問が終わったらしい、項垂れた様子できちんと椅子に座り直す。

シグナムとシャマルは、体勢を崩さなかったはやてにホツとしていた。

「「「………」」」

食事を中止して、何かを考え始めるはやて。この場を盛り上げる役回りを務めていたはやてが沈黙すると、正直微妙な静寂しか起らない。

空気を読むに長けた気のいいお姉さんのシャマルも、何か言葉を発してこの微妙な間を打破しようと口を閉口していたが、あまりの沈黙についに口を閉ざす。心無しか、肩を落としていた。

「………決めた!」」

「っ!」

いきなりの大声。出所はやはりはやて。
バンツ、と食卓を叩くのはマナー違反云々だが注意する者は誰もいない。

「斜ちゃん！」

ビシッと真犯人を指差す探偵のように斜に人差し指を向ける。気のせいか、斜にははやての瞳が輝いて見えた。

「今日から、家に住んでええで！！！」

七話 一日の終わりに

シグナムは、現在悩んでいた。

シグナムの主である所の八神 はやてが得体の知らない魔導師を食卓に招いた拳げ句に、思い付きだけで得体の知らない魔導師の居候を決定させたのだ。

守護騎士のリーダーと言う役柄上、頭を悩ませるのはやはりシグナムとなった。心配し過ぎかもしれないが、やはり警戒はするに越した事はない。

因みに、食卓で居候を提案したはやてをシグナムはものの三秒で拒否案を提案した。主の命令は絶対だったが、主に危険が振りかかるのはなるべく避けたい が、それをはやては絶対に譲らない。

元々頑固な気質を備えているのだ。更に、今回言い出した案は正当な物だ、はやてが諦めると言う選択肢は存在せず、結局押しきられる形となってしまうた。

「……どうしたものか」

自分の部屋の、程よくふかふかなベッドに腰かけるシグナム。はやては、斜に部屋を紹介すると一階の部屋へ行った。

シヤマルとヴィータが付いて行ったのだから大丈夫だろうと考える。

「（……どうするも何も、奴が信じるに値する人間かどうか見極めるまで注意するしかできないだろう）」

部屋で思索していたシグナムの脳内に割り込むように侵入して来た男の声。シグナムにとっては馴染み深い同胞の声だ。

ザフィーラ。青い毛並みを持つ犬の姿と人間の姿、両方とれる同じ守護騎士であり、はやてを支える同胞。

「（確かにそうしかできないが、ザフィーラも分かるだろう。一つ屋根の下に味方が敵かも分からない輩が居る。我々だけならそれでも別に構わない。だが、我等には主はやてがいる）」

そうなのだ。この八神家に居るのが守護騎士だけならば何も問題はない。だが、違う。

この家には、守護騎士達にとって自らの命よりも大切な　はやてがいる。慎重になるのも仕方がないと思えた。

「（ああ、我らには主はやての命が最優先だ。　だが、七鎖 斜なる人間を住ますと決めたのも、主はやてだ）」

「（っ……しかし!）」

唇を噛みしめて念話に集中する。仄かに鉄の味が舌の上に広がった。

「（それに、我らは主を守る守護騎士　主に傷を負わせるより早く、害を成す者を討つのが我々ではなかったのか?）」

念話での言葉が、密かに熱くしていたシグナムの脳を冷ました。

そうだ。我等は守護騎士。どんな敵からも、災害からも主を第一に考え主を行動理念に置き、主に従い主を守る守護騎士。相手が主に剣を向けるのならば、その剣を砕けばいいのだ　そう、我等は、守護騎士なのだから。

「（……私はリーダー失格だな。ザフィーラに頭を冷やされるとは）」

少し俯いて、自重の笑みを浮かべる。

「（仕方ないだろう、アレと会話すれば頭に血も登る）」

アレとは、七鎖 斜の事だ。

一目見た瞬間、経験から様々な人を見るのが多いシグナムは斜の異様に背筋が冷えた。

シグナムが彼女に抱いた印象は、死んだ人形のように。だった。生気を感じない。瞳が死に、言葉に覇気を感じない。生物としての機能は正常だとしても、人間としての大事な機能が決定的に破壊されている。シグナムは一目見ただけでそこまで思った。

「（アレは……本当に人間なのか？）」

自分でも理解しているつもり質問をザフィーラに投げ掛ける。直ぐに答えは帰って来た。

「（人間だろう。きちんと人間の匂いはした……だが、俺にはそれが気持ち悪かった。アレは、虚無が人間の形をしたような人間だ）」

「（主はやても、凄いものを連れて来たものだ）」

「（悔いているか？ アレを家に上がらせた事を）」

「（今更後悔しても、意味がない。主はやてが決めた事だ、私はア
しから主を守る。それだけだ）」

「（……………そうか）」

と言った会話が行われていたのが、七鎖 斜が転生した一日目の
夜だった。

あまりに長く、あまりに出逢いの多い斜の一日は、ここで終わっ
た。

様々な運命を、狂わせて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333/>

魔法少女リリカルなのは ~人生への終演~

2010年10月15日21時39分発行